

千姫：祈りにおける慰め

千姫の息子の死

封建時代の日本の女性が縁を切りたいと望めば、たとえ夫が亡くなった場合であっても、彼女はまず「縁切り寺」すなわち『関係を断ち切る寺』に入らなければならなかった。離婚を希望する女性や再婚を希望する未亡人たちは、これらの特別な寺院の1つで、御勤めと祈りの期間を過ごさなければならなかった。しかし姫たちは特別な免除を受けていた、つまり自分で縁切り寺に入るのではなく、千姫(1597－1666)は彼女の亡くなった最初の夫である豊臣秀頼(1593－1615)との絆を断ち切るために代理人を送った。

彼女はその近道を後悔するようになった。千姫の息子の幸千代(1618－1621)は幼い頃に病気で亡くなり、千姫はもう一人の子供を産もうとしたが、何度も流産で苦しんだ。占い師は秀頼の怒りの魂がこれらの不幸の背後にあったに違いないと言って彼女のことを責めた。千姫はこれに応じて仏教の神である観音の像を依頼した。その像の中に秀頼の呪いから解放されるよう願う祈りを書いて納めた。彼女はまた伊勢地方(今日の三重県)にある慶光院の住職たちに彼女に代わって祈るよう命じた。

宗教への転換

千姫はまた神道の神である天神の信奉者でもあった。彼女は姫路城から見える丘男山にその神をまつる神社を建てるよう命じた。そして城の神棚に祀られていた木製の天神像を設置した。西の丸の回廊にある彼女の住居から、彼女は次の息子の誕生を毎日祈った。

彼女の祈りは報われなかった。千姫は二度と子供を産むことはなく、夫の本多忠刻(1596－1626)は1626年に病気で亡くなった。ようやく30代になったばかりだった。忠刻の死後、千姫は姫路城を出て尼になり、髪を切り落とし宗教上の名前天樹院と名乗った。69歳の時である。

千姫に依頼された観音像

千姫が呪いから解放されることを願い、仏教の神である観音様の像の内部に自筆の祈りを入れた。

千姫天満宮神社に千姫によって捧げられた天神の像

千姫は神道の神である天神の像を城から男山天満宮へ移させた。